

第11回日本認知症予防学会学術集会， 第52回日本臨床神経生理学会学術大会

作業療法学専攻 大類 淳矢

作業療法は、生物学、心理学、社会-文化的領域のいずれもあるいは複数を対象とする。生物学や生理学、物理学などは還元主義的な領域であり、一方で心理学や社会学などはホリスティックな領域である。今回、ホリスティックな領域では認知症予防学会学術集会、還元主義的な領域では日本臨床神経生理学会での発表内容を報告する。

日本認知症予防学会は、認知症治療に携わる多くの業種の人が集い、予防の観点からの認知症対策を進めることを目的に、2011年に設立された。ここでいう予防とは、第一次予防（認知症の発症予防）、第二次予防（認知症の早期発見・早期治療・早期対応）、第三次予防（認知症の進行予防）の3つの予防のことを言う。2022年9月23日から9月25日に福岡国際会議場で第11回学術集会が開催され、「地域在住高齢者における作業参加とフレイル、認知機能の関連について」を発表した。本発表は、本学が貝塚市と共催している「つげさんヘルスチェック」事業での調査データの内容であり、フレイルと個人の健全な状態にとって望ましい、あるいは必要な仕事、遊び、日常生活活動への従事（作業参加）、その他背景因子との関連を報告した。地域在住高齢者153名の調査結果、作業参加はフレイル基準の該当数及び不眠尺度と負の相関、ソーシャルネットワークと正の相関を有し、作業参加と関連のあるソーシャルネットワークや睡眠状況を良好に保つことがフレイルや認知症予防につながり、作業参加という視点が認知症やフレイル予防に役立つ可能性が示唆された。なお本演題発表は、第11回学術集会浦上賞を受賞した。

日本臨床神経生理学会は、脳から脊髄、末梢神経、筋に至る広い範囲の機能とその病態を、生理学的に研究している人々の集まりで、ヒトの神経系を中心とする複雑なシステムの研究を推進している学会である。1971年に設立された日本脳波・筋電図学会が、2000年に現在の名称に変更された。2022年11月24日から26日に国立京都国際会館で第52回学術大会が開催され、「精神科作業療法の集団という治療構造が持つ効果—脳波・自律神経を用いた検討—」を発表し、単独手工芸と他者との並行手工芸の生理学的特徴の違いを報告した。健常若年者8名の測定結果、並行条件では単独条件よりも γ 帯域において右下頭頂小葉周辺領域の活動が有意に高まり、交感神経活動は低下する傾向で、並行条件を構成する他者との親密度が高いほど交感

神経活動が低下していた。他者との並行作業は単独作業よりもデフォルトモードネットワークに近い脳活動を呈し、よりリラックスした状態である可能性が示唆され、臨床における集団での作業療法場面の効果を電気生理学的に説明した。

ホリスティックな領域と還元主義的な領域の研究活動を進め、今後さらにそれぞれの領域での作業療法のエビデンスを示していきたい。